

第150回 三方限古典塾（'19, 4, 18）

「南洲翁手抄言志録」（その9）

40 読書も亦心学なり。必ず寧静を以てして、噪心を以てする勿れ。必ず沈実を以てして、浮心を以てする勿れ。必ず精深を以てして粗心を以てする勿れ。必ず莊敬を以てして、慢心を以てする勿れ。
孟子は読書を以て尚友と為せり。故に経籍を読むは、即ち是れ嚴師父兄の訓えを聴くなり。史子を読むも、亦即ち名君、賢相、英雄、豪傑と相周旋するなり。其れ其の心を清明にして以て之と対越せざる可けんや。（言志後録－144）

（意識）読書も心を修める学問である。必ず心を安らかにして読み、ざわついた心で読んでほならない。落ち着いた心で読み、浮いた心で読んでほならない。精しく深く考えて、粗雑に読んでほならない。慎んで読み、高慢な心で読んでほならない。

孟子は、読書とは優れた古人を友として交わることだと言った。故に儒学の経典を読むのは、厳しい先生や父兄の訓戒を聴くのと同じである。歴史書や諸子百家を読むのは、名君や賢い宰相、英雄や豪傑と交際するのと同じである。それ故に、読書に際しては、心を清明にし、書中の人物を超える気概を持って相對せねばならない。

（余説）学問を修めるについて、先月の「学は自得するを貴ぶ。人徒らに目を以て字有るの書を読む。故に字に局して、通透するを得ず。当に心を以て字無きの書を読むべし。」をさらに発展させたものです。

読書は、時空を超えた賢人たちと親しく交わることであるだけに、それに相応しい心の準備と態度が求められるのは、当然ではないでしょうか。

なお、南洲手抄言志録においては、本文の前半3行は省かれています。

41 学を為すの緊要は、心の一字に在り。心を把つて以て心を治む。之を聖学と謂う。政を為すの着眼は情の一字に在り。情に循つて以て情を治む。之を王道と謂う。王道、聖学は二に非ず。（言志晩録－1）

（意識）学問をするに当たってさし迫って必要なことは、「心」という一字にある。自分の心を正しく把握して落ち着ける。これを聖人の学という。政事をするに当たって先ず眼をつける所は「情」という一字にある。人情の機微に従って人々を治める。これを王者の道という。この聖人の学と王者の道とは一つであって二つではないのである。

（余説）日々の生活において、迷い、悩み、あるいは奮い立ちながら、なかなか思うに任せないのが「心」です。その「心」とは一体何なのか。古来多くの識者がこの厄介なモノに悩まされてきました。「心」という漢字は、血液を全身に送るポンプである心臓の象形文字ですので、古代中国では心はそこにあると考えたのでしょう。

「情」とは「物事に感じて起こる心の動き・主観的な意識・気持」と広辞苑にあります。聖人の学と王者の道とはどちらも、心を正しく把握する点で共通します。

（参考）佐藤一斉・言志録 11「権は能く物を軽重すれども、而かも自ら其の軽重を定むること能わず。心は則ち能く物を是非して、而も亦自ら其の是非を知る。」
沢庵禅師・不動智神妙録「心こそ心迷わず 心なれ 心に心 心ゆるすな」

47 人は皆身の安否を問うことは知れども、而も心の安否を問うことを知らず。宜しく自ら問うべし。「能く闇室を欺かざるか否か。能く衾影に愧じざるか否か。能く安穩快樂を得るか否か。」と。時時是くの如くすれば心便ち放れず。

(言志後録－98)

(意識) 人は皆身体の安らかであるか否かを問うことを知っているが、心が安らかであるか否かを問うことを知らない。そこで、次のように自らの心に問うて見るがよい。

「暗い所でも良心を欺くような事はないか、否か。独り行く時自分の影に恥じないか、否か。独り寝る時の夜具に恥じないか、否か。自分の心が安らかで穏やかで、楽しんでいるか、否か。」と。時々このように反省すれば、心は決して気ままなることはない。

(余説) 己の心については上記のようにすれば、分かるのかも知れませんが、他者の心の安否については、それが深刻な方向に進んでいても、体の安否とは異なり目に見えにくいだけに、それに気付くのはなかなか難しいことのように思われます。

(参考) 大学「小人間居して不善を爲す。故に君子は必ず其の独りを慎むなり」

宋史「闇室を欺かず」(誰も見てない暗い部屋でも、後ろめたいことをしない。)

詩経「屋漏に愧じず」(人の見ていない所でも、恥ずかしい行いをしない。)

後漢書・楊震伝「天知る、地知る、我知る、子知る」(悪事は必ず露見する。)

50 惻隱の心も偏すれば、民或いは愛に溺れて身を殞す者有り。羞惡の心も偏すれば、民或いは自ら溝瀆に経るる者有り。辞讓の心も偏すれば、民或いは奔亡して風狂する者有り。是非の心も偏すれば、民或いは兄弟牆に鬩ぎ、父子相訴うる者有り。凡そ情の偏するは、四端と雖も、遂に不善に陥る。故に学んで以て中和を致し、過不及無きに帰す。之を復性の学と謂う。(言志録－225)

(意識) 憐れみ痛む惻隱の心も、度が過ぎると、民衆の中には愛に溺れて身を亡ぼす者が出てくる。自分の不善を恥じたり、人の不善をにくむ羞惡の心も、度が過ぎると、民衆の中にはドブの中で首をくくる者も出てくる。辞退すべきは辞退し、讓るべきは讓る辞讓の心も、度が過ぎると、民衆の中には逃げ隠れたり、気がおかしくなる者が出てくる。善悪正邪を識別する是非の心も、度が過ぎると、民衆の中には兄弟喧嘩をしたり、親子訴訟を起こすような者が出てくる。

このように感情が一方に片寄り過ぎると、孟子の説く「仁・義・礼・智」の道に進む糸口である「四端」までが、よくないことになる。故に、学問をして性情を中正にし、過不及無きようにせしめる。これを「復性の学」と言っている。

(余説) 何事もバランス・ほどほどが大切です。但し、妥協とは違うことに配慮したいものです。秋月種樹は[評]で、佐賀の乱(1874)の江藤新平と、萩の乱(1876)の前原一誠について、「惜しいかな、豈四端の偏ありしものか」と歎いています。

朱子の「端緒(糸口)」について、伊藤仁斎は「端本(本源)」だと反論しています。

(参考) 孟子・公孫丑篇「惻隱の心は仁の端なり。羞惡の心は義の端なり。辞讓の心は礼の端なり。是非の心は智の端なり。人のこの四端あるは、猶おその四体あるが如し。」

論語・先進「過ぎたるは猶及ばざるがごとし」(過不及どちらもよろしくない)

「薬も過ぎれば毒となる」「礼も過ぎれば無礼となる」「分別過ぎれば愚に返る」